

高等学校

平成 14 年 度

教育研究員研究報告書

国	語
---	---

東京都教職員研修センター

平成14年度

<国語>

教育研究員名簿

学 区	学 校 名	氏 名
1	都立九段高等学校	高松美紀
1	都立城南高等学校	大郷さつき
3	都立荻窪高等学校	加藤泰弘
5	都立足立高等学校	平林正男
5	都立青井高等学校	◎樋口義郎
6	都立小岩高等学校	細川中
7	都立松が谷高等学校	水井久史
8	都立羽村高等学校	○横坂直子
8	都立五日市高等学校	吉田寿美
9	都立清瀬東高等学校	内田圭一

◎世話人 ○副世話人

担 当

東京都教職員研修センター 指導主事 高田純一

研究主題

社会生活で必要となる論理的な表現力を育成する指導及び評価のあり方

目次

I	主題設定の理由	2
II	主題解明の方法	5
III	研究の全体構想	7
IV	指導の実際	8
IV-1	改まった場で論拠に基づいた表現を行うことによって 自己の論理的な表現力を育てる指導の工夫	8
IV-2	他校の生徒と相互評価を行う機会をもつことによって 自己の論理的な表現力を育てる指導の工夫	16
V	まとめと今後の課題	24

社会生活で必要となる論理的な表現力を育成する指導及び評価のあり方

I 主題設定の理由

1 高校生の言語生活

文化庁文化庁国語課の『世論調査報告書 平成12年度 国語に関する世論調査 [平成13年1月調査] 家庭や職場での言葉遣い』によると、普段の生活で接する人やテレビで見る人などの言葉遣いが乱れている、と感じる人は全体の9割、88.9%に及ぶという調査結果が報告されている。また、同報告書で「どの年齢層の言葉遣いが乱れているか」という設問に対して、中学生や高校生の年齢層と答えた人が54.0%おり、過半数の人が中高生の言葉の乱れを意識している。これに、20歳前後から30歳前ぐらいまでの若者と答えた人(26.7%)を加えると、全体のほぼ8割に達する。

同報告書では、情報機器と言葉との関わりについても調査を行っている。携帯電話の話し方についての設問では、用件のある時に話す、という回答が圧倒的に多かったが、20代以下では「特に用件のないおしゃべりをする人が多い」「だらだらと長く話すことが多い」と答える人が2～3割いた。また、電子メールのやりとりで感じる事として、若年層ほど言葉遣いや顔文字で親しみを増す、と答える傾向が顕著であった。

このような報告を踏まえながら、現場に立つ教師として高校生の言語生活の実態をみると、話しことばに関しては、親しい関係の相手と話すときには場面や相手の立場を考慮することができるが、改まった場で多人数を前にしたときなどに状況に応じて話すことが難しくなるようである。書きことばに関しては、電子メールでのやりとりが普及するにつれて、①要点だけを捉えた簡潔なやりとりができるようになった、②話すように書けるので、思ったことが言いやすくなった、というように、書きことばに親しみやすくなった面も否定できない。しかし、これはいわば書きことばが話しことば化された現象であるとも言え、書かれた文章の実態は、断片的な表現や仲間同士の言葉を使ったものであったり、単語を並べただけの言葉や流行表現に依存したものであったりしている。高校生の言語生活環境では、仲間以外の他者に対して表現する機会はそれほど多くはない。意見や事実の説明を書く経験は少なく、論理性に気を配って書く経験には乏しい。すなわち、気心の知れた仲間同士でのやりとりが中心となりがちのため、相手の立場や目的・場面など状況に応じて表現を工夫して使い分けたり、論理的に表現したりするといった、社会人として必要とされる言語能力が十分とは言えないのが実態である。

2 高校生の話すこと・書くことに関する実態調査

今回、この研究を行うに当たって、研究員が所属する都立高校10校の生徒計671名を対象として、高校生の「話すこと・書くこと」に関する実態調査を行った。以下、調査結果を6項目にまとめた。

(1) 高校生が関心を持っていること

まずは、高校生が関心を持っているものを質問した。1位が趣味、部活動、2位が進路、3位が友人の順に、回答数が多かった。反対に、最近の社会問題、ボランティア活動等の回答を寄せた生徒は少ない。この結果から、自分に身近な事柄には関心をもっているが、社会的な事柄には関心をもちにくい現在の高校生の姿がうかがえる。

(2) 高校生が身近に接しているもの

次に、調査の直前1週間に、生徒がどのような情報媒体に接したかを尋ねた。671名中

612名と、1位は圧倒的に携帯電話・電話であった。2位は596名のテレビ、3位は561名のCD・MD・カセットテープレコーダーだった。携帯電話で頻繁に会話をやりとりし、メールを送り、家ではテレビを視聴し、CD等で音楽に親しむ、現代の高校生像が浮かび上がってくる。しかし、注目すべき点は、新聞の444名、本の342名である。毎日とは限らないが、66%の生徒が新聞を、51%の生徒が本を読んだという結果は、彼らが活字文化を全く否定しているわけではないことがわかる。

(3) 身近な人と話す経験、書く経験

調査の直前1週間における身近な人以外との話す機会、書く機会の有無を聞いたところ、話す方では、機会ありが37%、書く方では機会ありが7%となり、身近な人以外とコミュニケーションを行う機会が本当に少ないことがわかる。身近な人以外としてあげられた話し相手は、買い物をした際の店員、近所の人等が目立ち、そこでは日常会話の範囲で済む場合が多い。

(4) わかりやすく人に話すことができるか

家族に、友人に、学級に、全校生徒に、進路希望先の面接官にという5つの対象者に関して、よくできる、できる、あまりできない、できないの4段階で答えてもらった。家族から、進路希望先へと、論理的に話す能力の必要性が増すに従って、逆にわかりやすく話すことができるという生徒の回答が減ってくるのが現状である。

(5) 文章を書く頻度

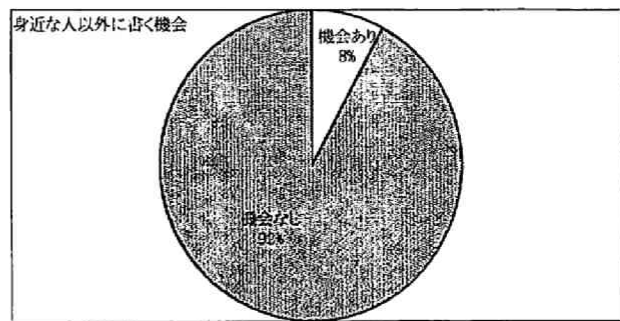
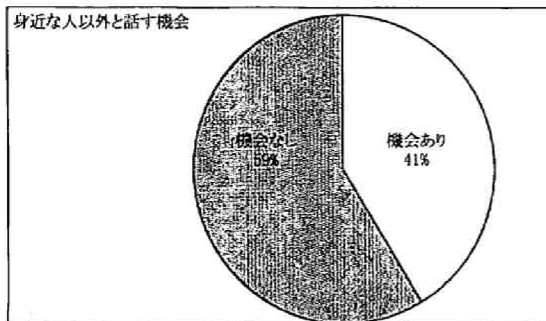
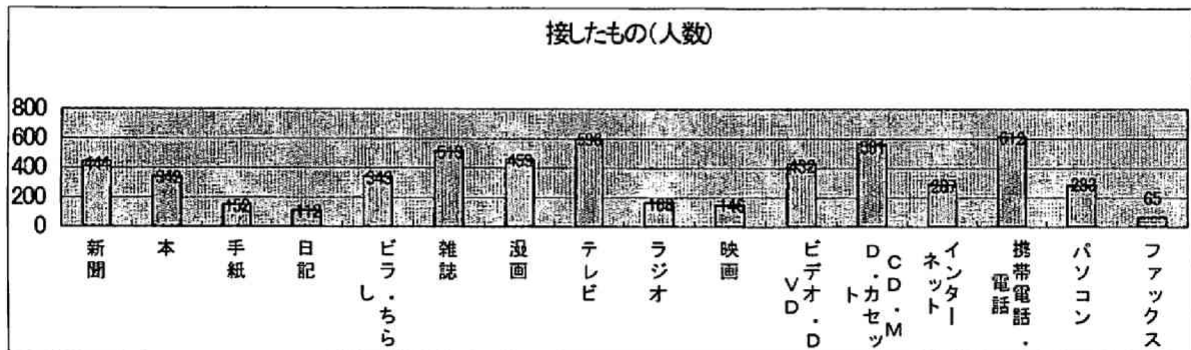
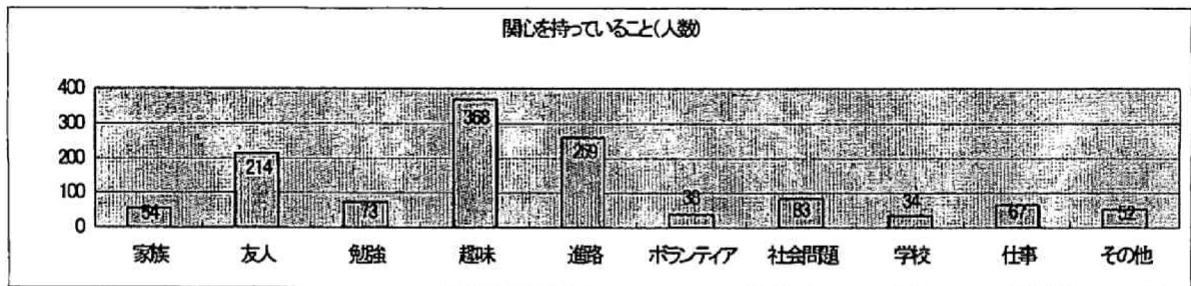
私的な日記、公的な日誌、メモ、手紙、メール、作文・意見文、レポート、投書・投稿、創作に関して、書く頻度を、よく書く、たまに書く、ほとんど書かない、全く書かないの4段階で回答してもらった。メールの頻度は高く、全体の76%がよく送る、たまに送ると答えている。メモや手紙も、半数近くが、よく書く、たまに書くと答えている。生徒は、親しい相手とのつながりは大切にし、気軽にコミュニケーションを行っているようである。ところが、作文・意見文、レポート、投書・投稿、創作といった、読み手を限定しないで、書き手に論理性を要求するようなものに関しては、8割程度の生徒がほとんど書かない、全く書かないと答えている。

(6) 話すこと・書くことに関して身に付けたいこと

最後に、話すこと・書くことに関して身に付けたいことも聞いた。話すことに関しては、言葉遣いや敬語、相手を納得させる方法、話の構成の仕方について学びたいと答えた生徒が多い。書くことに関しては、書きたいことをまとめる方法、テーマに対応して何を書くか、その場に適切な言葉遣いについて学びたいと答えた生徒が目立つ。

以上の調査結果からは、先にも述べたように、自分を中心とした狭い世界の中で、気持ちの赴くままに、仲間とコミュニケーションを行う生徒の実態が見えてくる。日常生活では、これからの社会で必要とされるであろう、様々な状況に応じて論理的に表現をするといった表現力を磨く機会は少ないが、機会があれば表現力を向上させたいとの思いがあることも、調査結果から読みとれる。

次ページに代表的なアンケートの回答を集計したものを載せる。



3 本研究において目指すもの

このような状況を踏まえ、高等学校国語の授業改善を目指して、私たちは「社会生活で必要となる論理的な表現力を育成する指導及び評価のあり方」という主題を設定した。

前掲の文化庁による報告書の、平成13年度版『日本人の言語能力を考える』では、向上させたい国語能力について次のように報告されている。書く力については「内容が読み手に正しく伝わるように文章を書く力」(46.8%)、話す力については「自分の考えを筋道を立てて述べ伝える力」(43.4%)を向上させたい能力としてあげた人の割合が高かった。いずれも、論理的な表現力の育成を求めているものと考えられる。あわせてここで、日本人の国語能力を向上させるための方策を尋ねた設問に、一番多くの人が「学校での国語教育の充実を図る」(61.5%)と回答していることも付記しておく。

以上のことから、私たちは、「話すこと」「書くこと」の各領域において、次のような研究仮説を立てた。「話すこと」では「改まった場で論拠に基づいた表現を行うことによって、自己の論理的な表現力を磨くことができるであろう」、「書くこと」では「他校の生徒と相互評価を行う機会をもつことにより、自己の表現力を客観的に再認識することが可能となり社会生活で必要となる論理的な表現力が身に付くであろう」というものである。なお、単元設定に当たっては、新しい学習指導要領の必修科目「国語表現Ⅰ」を念頭に置いた。

Ⅱ 主題解明の方法

1 「話すこと」の領域

高校生が仲間同士で使う表現には、断片的で直感的なものが多く見受けられる。話すことの領域では、それらの断片的な表現や仲間同士の言葉、単語を並べただけの言葉や流行表現などを、社会一般に通用する論理的な表現へ変化させることを目指した。個人的な感覚の言葉だけに頼るのではなく、より社会的な意識を持って表現する力を育成するために、明確な論拠を持って話をする、社会一般で通用する話し方・話し方を意識すること、聞き手を意識した話し方に気を付けることなどが必要であると考えた。

具体的には、「スピーチ」「ディベート」「番組作り」といった3つの活動を関連付けた単元の設定によって主題の解明を目指すこととした。「スピーチ」では、人前で話すという経験をする点に主眼を置く。「ディベート」では、論理的な表現をするためには論拠が必要であるということを理解させるという点にねらいの中心を置く。「番組作り」では、自分の意見と違う他者がいること、反論があることを想定しながら自分たちの主張を表現するという点を最重要と考え、音声表現を中心に構成した。

学習過程は次のように構想した。

「スピーチ」については、この単元に入る以前に、授業の冒頭若しくは最後の5分間などに3人ずつ行うなどの工夫をしながら、生徒全員が実践し経験しているという状況を作っておくものとする。その中で、話し方の練習を行っておく。

第1時：「ディベート」及び「番組作り」の基礎、チーム作り、テーマ選び

第2時：「ディベート」に向けての話し合い

第3時：「ディベート」ゲーム①

第4時：「ディベート」ゲーム②

第5時：「番組作り」に向けての話し合い、作成

第6時：「番組」発表

第7時：評価、まとめ

第1時では、「ディベート」と「番組作り」の内容とねらいについて解説を行い、授業計画と学習のねらいを明らかにする。チームに分かれた上で、提示されたテーマについて肯定側・否定側のどちらを担当するかを決定する。テーマについては次のようなものが想定できる。「小学校から英語教育を導入すべきである」「サマータイムを導入すべきである」「公共交通機関の優先席は不要である」等である。第2時では、「ディベート」のための班別話し合いを行う。立論作成にあたっての情報収集、分析、構成力などが求められる。第3、4時で行うディベートでは、立論構成に加え、討論の相手方に主張が適切に伝わる表現を意識することや、相手の考えを的確に理解する力も必要となろう。第5時に、ディベートで交わされた相手方の意見を入れながら、数分の映像番組を作成する。説得力を持った表現を行う、語尾や敬語表現などに注意を払う、表情や声のトーンに気を付けるなど、聞き手を意識して制作するといったことも留意点となるだろう。第6時では作成された映像番組を発表する。発表者が自己評価を行い、教師が講評を行う。第7時に、この授業を通してどのような力が身に付いたか、まとめと自己評価を行う。なお、学習過程のポイントごとに自己評価、相互評価を行い、学習の成果を確認するとともに、次時に向けてのねらいを明確にし、学習意欲を喚起するよう工夫した。

2 「書くこと」の領域

高校生の言語生活を観察すると、ごく親しい友人や家族以外の人と接する機会が極めて少ないことに気付く。親しい間柄では、一語文だけでも、ある程度の会話が成立し得るし、論理性を欠いた表現でも相手が真意を察してくれる。高校生は、日常身近な人々に用いている言語表現のみではコミュニケーションが成り立ち得ないような機会が少ないために、自己の論理的な表現力の欠如を意識することも、そうした力を養おうとする意欲ももてずにいるのが現状である。

こうしたことを踏まえて、「書くこと」の領域では、親しい間柄ではない人とコミュニケーションをとる機会を生徒たちがもつことにより、日常用いている言語表現では不十分であることに気付き、社会生活で必要となる論理的な表現力を育成することを目指した。

具体的には、面識のない他校の生徒と小論文を交換し、相互評価と推敲を重ねる機会をもち、①最低限の言葉のやり取りや日常用いている言語表現でも十分に言いたいことは伝え合えるだろうという姿勢から抜け出すこと、②事前に何の共通認識も持たない相手に対して自分の意見や考えをよりの確に伝えるためには、論理的な構成や目的に応じた表現方法が必要であることに気付くこと、③相互評価の積み重ねの中から他者の表現の長所を学ぶとともに、自己の表現に欠落するものに気付くこと、④自己の表現力を再認識することにより、より論理的な表現力の向上を目指すこと、の4点の工夫を行った。

学習過程は次のように構想した。

第1時：論理的な文章とはどのようなものか認識する。

第2時：他校の生徒が読み、評価することを意識して小論文を作成する。

第3時：他校の生徒の文章を評価する中で論理的に書くことの必要性に気付く。

第4時：他者の評価を受け、より論理的な文章を書く糸口とする。

第5時：再び他校生徒の小論文を読み再評価する。

第6時：前時までの内容を自己評価し、論理的な表現力が向上していることを確認する。

第1時では、日常生活の中で、仲間内であるからこそ通じる省略の多い表現や、断片的な表現を多用していることに気付くとともに、提示されたテーマで小論文を作成するための構成と論証のためにどのような資料が必要かを検討し、次時までに資料を収集しておくよう指示する。第2時では、収集した資料を有効に利用して実際に小論文の作成に取り組む。また、推敲する習慣が身につくよう留意する。第3時では具体的な評価の規準に従って、他校生の小論文に対して意見文を書く。第4時では他校生によって記された意見文から、身近な存在ではない相手には特に論理性が不可欠であることを意識する。また書き直す際にはどこをどう改善したのかははっきり意識して書くようにする。第5時で他校生の小論文を再評価する際には、その論理性の高まりを確認するとともに、自己の意見文の論理性も高まっているか確認する。第6時では、第1時から第5時までの内容を通して、自分の文章を書く意識がどのように変わったかを自己評価シートを用いて確認する。また、小論文を他校生徒と交換し相互評価と推敲を重ねてお互いの論理性の高まりを実感することが、今後においてもよりよく書こうとする動機付けとなり、資料を収集・整理する能力や社会生活で必要となる論理的な表現力を身につけることの必要性を確かめることを期待した。

Ⅲ 研究の全体構想

生徒の実態

- ごく親しい友人や家族以外と会話をしたり、文章をやりとりしたりする経験に乏しい。
- 友人や家族以外の人に自分の言いたいことをわかりやすく伝える自信がない。
- 場面や相手に応じた表現方法や話の構成のしかた、自分の書きたいことを順序よくまとめる方法を身につけたいと思っている。
- 社会人として必要とされる論理的な表現力が不十分である。

新学習指導要領から

- 自分の考えをもって論理的に意見を述べたり、相手の考えを尊重して話し合ったりする。
- 情報を収集、整理し、正確かつ簡潔に伝える文章にまとめる。
- 目的や場に応じて、言葉遣いや文体など表現を工夫して話したり書いたりする。
- 様々な表現についてその効果を吟味し、自分の表現や推敲に役立てる。
- 自己評価や相互評価を行う。
- 社会生活を充実させる態度を育てる。



研究主題

社会生活で必要となる論理的な表現力を育成する指導及び評価のあり方

研究仮説 1

改まった場で論拠に基づいた表現を行うことによって自己の論理的な表現力を育てることができるであろう。

《主な学習活動》

- 学習過程のポイントごとに、評価シートを用いて、自己評価、相互評価を行う。
- スピーチを行う（事前準備として）。
- 参考映像をもとにディベートゲーム、番組作りの基礎を学ぶ。
- ディベートゲームのための情報の収集を行う。
- ディベートゲームを行う。
- 番組作成を行う。
- 番組発表を行う。

研究仮説 2

他校の生徒と相互評価を行う機会をもつことによって自己の論理的な表現力を育てることができるであろう。

《主な学習活動》

- 小論文作成のための資料収集、整理をする。
- 他校生が読むことを意識して小論文を作成する。
- 他校生の書いた小論文を評価する。
- 他校生により評価された小論文をより論理的な文章となるように書き直す。
- 他校生が書き直した小論文を再度評価する。
- 評価シートを用いて自己評価を行う。

IV-1 指導の実際

改まった場で論拠に基づいた表現を行うことによって、自己の論理的な表現力を育てる指導の工夫

1 単元設定の理由

前掲の文化庁の報告や本研究に先立って行ったアンケートの分析結果からもうかがえるように、現在の高校生の話す相手は身近な人の割合が圧倒的に高い。したがって親しい仲間内での会話はするが、改まった場において、社会生活で通用する言葉を用いて論理的に自分の考えや意見を述べる機会は不足していると考えられる。そこで「話すこと」の領域では、授業の中で生徒全員が改まった場で話す機会を与えるという単元を設定することとした。その学習活動を通して、論理的に表現することの重要性を学ぶとともに論理的な表現力を身に付けることを目指した。

具体的な学習活動としては、前述のようにスピーチ、ディベート、番組作りと、学習内容を関連付けながら学習を進め、論理的に話すことが無理なく学べるように考えた。まず、スピーチでは、一つのテーマについて人前で話すことを経験する。そしてディベートでは、その経験を踏まえて、相手を論破し自分の意見を的確に伝えるためには、感覚的、断片的な言葉ではなく、明確な論拠が必要であることを意識することを目指した。本単元の最終段階の番組作りでは、直接は相手の反応が見えない状況で自分の考えを伝えなければならない。その場での反駁や修正は行えないので、制作段階で相手からの反駁を確実に予想しなければならない。したがって、ディベートとは一味違った論拠と構成力が必要とされるようになってくる。また論点を明確にするための資料や図表の効果的な活用も要求される。

ディベート、番組作りともに、評価者も論理的な説得力の有無という規準で評価することになるので、自然に「論理性」を意識することになる。発表する側だけでなく、聞く側の生徒も同時に学ぶことができるように考えた。

2 指導の工夫

- ①スピーチ、ディベート、番組作りと、三つの活動を関連づけて、論理的な表現力や構成力を身に付けるよう工夫した。
- ②全員がスピーチを行うとともに、グループでディベートや番組作りに取り組むことで、クラス全員が実際に体験することを可能にした。
- ③グループ内で役割をもつことにより、主体的に取り組めるように設定した。
- ④ディベートと番組のテーマを同じものにするすることで、それまでの学習活動をより具体的に活用できるようにした。
- ⑤評価シートやアンケートを用いて自己評価、相互評価ができるようにした。

3 評価の規準

- ①自分の考えや意見を的確に伝えるための論拠の必要性が理解できたか。
- ②改まった場での論理的な話し方や語いが身についたか。
- ③人前で話すことが学習前に比べて苦にならなくなったか。
- ④収集した資料を効果的に使い、意欲的に活動に参加できたか。
- ⑤聞き手や評価者としての規準が理解できたか。

4 単元の指導計画

(1) 単元名 「論理的に話そう！ ホップ・ステップ・ジャンプ」

(2) 単元の目標

- ① 明確な論拠をもち、自分の考えが相手に伝わるように話をする。
- ② 改まった場、実際の社会生活で通用する語いや話し方を身に付ける。
- ③ 聞き手を意識して、わかりやすく話す。
- ④ 意欲をもって、主体的に学習活動に取り組む。
- ⑤ 聞き手や評価者として必要な態度学び、評価の規準を理解する。

(3) 学習活動の概要（7時間）

この単元に入る前に、生徒たちが話すことに関してどのような意識を持っているかアンケートを行う。

時数	生徒の学習活動	○指導上の留意点 ◇評価の規準
事前準備	①スピーチの概論・留意点を確認する。 ②全員がスピーチを経験する。 （毎時間の冒頭又は最後に、1人2分程度3人ずつ行う） ③スピーチを集中して聞く。 （メモを取る、発表者を注視する） ④スピーチ後に評価シートを記入。 ⑤チーム作り。（4チーム）	○時間内に話をまとめるように注意する。 ○話し手に評価をフィードバックする。 ○次回以降、気を付ける点を伝える。 ◇改まった言葉遣いになっているか。 ◇話す姿勢（視線・声の大きさ・口調など）は適切か。 ◇論理に一貫性はあるか。 ◇的確な語いを使用しているか。 ◇聞く姿勢はできているか。
1	①アンケート結果から問題点の確認。 ②参考映像を見る。 （NHK「視点・論点」「クロスアップ現代」や他校のディベート実践例） ③「ディベート」「番組づくり」の基礎を学ぶ。立論・質疑（尋問）・反駁からなる、ターン制のディベートゲームの基本ルールを知る。 ④チーム内の役割分担を行う。 （ディベート・番組） ⑤テーマ選びを行う。（2つ） 「英語の早期幼児教育をすべきである」など	○身近な人以外と話す機会が少ないことを確認する。 ○ディベート、番組作りの手引きを作成しておく。 ○具体的な映像資料を用いる。 ○テーマ（ディベート、番組共通のもの）を教員側で複数用意しておく。 ○肯定側・否定側のどちらになるかは抽選等で決定する。 ○次回の準備として、各人調べてメモを作成するように指示する。 ◇基本的な方法を理解できたか。 ◇論拠や情報の有効性を意識できたか。
	今単元におけるディベートゲームは、以下の時間配分で行う。 肯定側立論3分 質疑（否定から肯定）2分 作戦タイム1分 否定側立論3分 質疑（肯定から否定）2分 否定側第一反駁3分 肯定側第一反駁3分 否定側第二反駁3分 肯定側第二反駁3分 計23分	

2	<p>①情報収集、話し合いを行う。</p> <p>②ディベートのための計画シートを作成する。</p> <p>③評価シートの記入を行う。</p>	<p>○情報の信頼性と収集の仕方（図書館・情報機器の利用など）について助言する。</p> <p>◇信頼性のある情報に基づいているか、有効な情報を取得できたか。</p> <p>◇論拠に基づく内容になっているか。</p>
3 4	<p>①「ディベート」ゲームを行う。 （1時間1～2チーム）</p> <p>②評価シートの記入を行う。 （聞き手は判定者として他己評価・ディベート参加者は自己評価をする）</p>	<p>○どちらが優位であったかの判定のみ行い、詳細な評価はまとめの時間に行う。</p> <p>○ディベートの様子を録画する。</p> <p>◇改まった言葉遣いができているか。</p> <p>◇論拠に基づいて構成しているか。</p> <p>◇資料は効果的に使われているか。</p>
5	<p>①前回のディベートの反省点を話し合う。</p> <p>②評価シートに、問題点を整理して書く。</p> <p>③問題点をふまえながら、番組の原稿を作成する。また、必要な資料やパネルなどを作成する。</p> <p>④準備ができた班は録画する。</p>	<p>○ディベート出場者と見学者それぞれの視点から、論拠や話し方などを検討する。</p> <p>○発表者は1人とは限定しない。</p> <p>○録画の方法等を指示する。</p> <p>◇自主的に会を運営し、積極的に班活動に参加することができるか。</p> <p>◇問題点をふまえて、効果的な論の構成がたてられるか。</p> <p>◇効果的な資料の活用ができるか。</p>
6	<p>①「番組」を発表する。 （録画したものを放映し、クラスで見る）</p> <p>②評価シートを記入する。</p>	<p>○番組を評価することで、説得力のある話し方や構成、資料の扱い方を意識する。</p> <p>◇改まった言葉遣いができているか。</p> <p>◇聞き手にわかりやすい構成を工夫しているか。</p> <p>◇論拠に基づいた説得力ある内容か。</p> <p>◇評価から論理的な表現のあり方を整理することができるか。</p>
7	<p>①これまでの活動の映像を見る。</p> <p>②前回の評価シートの内容を発表する。</p> <p>③教師からの評価、講評を聞く。</p> <p>④本単元全体を終えての自己評価をする。</p>	<p>○ディベートや番組の映像から、幾つか場面を取り上げ、論理的で効果的な表現を確認する。</p> <p>○前回の評価シートの記述や発表から、生徒が自主的に論理的な表現の注意点を挙げられるようにする。</p> <p>○出てきた意見を板書し、整理する。</p> <p>◇改まった場での話し方を学べたか。</p> <p>◇論拠に基づいて話せるようになったか。</p>

5 生徒はどのように学習に取り組んだか

(1) 事前準備 (概論・留意点の説明)

第1時に、授業計画と学習のねらいを明らかにした。生徒はかなり興味を示しながら熱心に取り組んでいた。生徒自身も「論理的な表現力」を身につけることの必要性を理解しているということが感じられた。しかし、実際に自分たちがスピーチやディベートをやることについては、未経験者が大半であり、不安な様子も見られた。

(2) スピーチ

生徒は、「全員が行う」ということによりかなり緊張感を持ったようである。スピーチに対する取り組み姿勢は、クラスの雰囲気にもよるが、若干の不安感も見られた。

しかし、全員が行うことによって、その負担が軽減され、意欲をもった者にはよい機会と受け止められたようである。

実際に行ってみると、普段クラスで目立たない生徒が、発表によって級友に認められて自信をつけるという場面もあり、生徒にも好評で、効果的な学習活動となった。

スピーチのテーマはあえて自由としたため生徒は各自の問題意識を改めて振り返ることになった。スピーチの準備のため、図書館を利用したという報告もあった。スピーチのテーマは、「報道のあり方」や「地球温暖化」などの社会問題から、「部活動」「携帯電話」など身近なものまで様々であった。

1 スピーチ

- フォーマルな話し方
- 聞く姿勢



スピーチをする生徒

9月30日 3組		スピーチ者:	評価者:
タイトル: マナーについて			
1 話す姿勢(姿勢よく、堂々と聴衆を向いていたか)	5	④	3 2 1
2 話し方(話す間や口調、声の大きさは適切か)	5	4	③ 2 1
3 話すことば(適切なことばを用いていたか)	5	4	③ 2 1
4 話す内容(わかりやすかったか)	⑤	4	3 2 1
5 話す構成(うまく組み立てられていたか)	⑤	4	3 2 1
特に良かった点 話しスピード。内容の分かりやすさ。川順だて。			
改善したほうが良い点 声の大きさ。言葉使いをもう少し気にした方がよい。友達に話している感じがした。自分の気持ちを言葉にもう少しのせれたらよい。			

「スピーチ」についての評価シート

評価シートは順番に一人ずつが記入したが、評価はおおむね適切であった。話す際の視線に気を付ける、語尾を不必要に伸ばさない方がいい、といった具体的な指摘、評価が見られた。聞く側の生徒が評価を通して、客観的に改まった場での話し方の留意点を学習できたことがうかがえる。

また、友人が何を考えてどのように表現するのか非常に興味があるようであり、友人の意外な一面を知ることができて良かったという声が多かった。このように、生徒の聞く態度は予想以上に積極的であった。

(3) ディベート

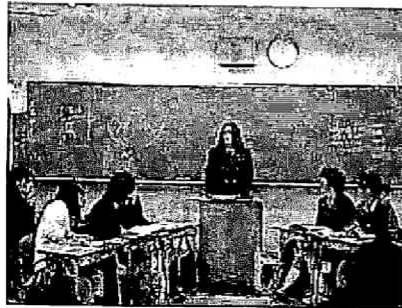
題材は教師が設定し、否定・肯定は抽選で決定した。自分の興味でテーマ、立場を選んでいないために、取り掛かりにくいという声もあったが、論駁に主眼をもつことができ、論拠をより深く追求しようとする姿勢が見られた。「最初の考えは浅かった。」「自分と違う意見に、それなりの根拠があった。」という意見が出た。



班別話し合い

ディベートのための班別話し合いには、あらかじめ課題として「個人メモ」を準備させた。そのため活発な意見の交換が見られたが、主観的な意見が多く、客観的な根拠や情報を活用するという視点が不足していた。これは、感想を話すことはあっても、客観的な根拠を持った意見を述べるという経験が乏しいためと考えられる。

資料の収集は、「何から手を付けて良いか分からない」「欲しい資料がインターネット検索できない」という班もあり、資料収集の方法・機会を提供する工夫が必要であった。そこで特に、図書館司書には事前に協力を求めておき、生徒の資料収集の場を確かなものとした。



3対3ディベートを行う生徒

ディベートは初めてという生徒が多く、その形式に戸惑いも見られたが、論拠の重要性に気付くためには大変有効であった。客観的な資料に基づいて話すことの重要性や確実な根拠を踏まえることにより説得力が増すといったことの理解が進んだようである。

最初に論点を項目として挙げる、定義やメリット・デメリットを板書する、など生徒自身による工夫も見られた。

ディベート後に生徒全員が判定と問題点の指摘を行った。この「判定・指摘シート」は、自分の評価や意見が直接参加者に伝わるため、生徒は熱心かつ具体的に書いていた。今回の評価は話し方よりも内容に主眼が置かれ、「立論が明確で説得力がある」「資料が効果的に使われていない」「質疑が効果的ではない」などの意見が見られた。また、論点をメモすることによって、論点を見極める意識も高まった。判定は、見学者の判定投票という形式を取ったため、是非の判定が一票読み上げられる毎に歓声が上がり、教室には活気が見られた。

終了後は「やり直したい」「もっとうまく説明したい」という意見が勝ち負けを問わず、参加者から聞かれた。他の生徒からも「大変そうだけどやってみたい。」「ディベートゲームに参加した者は絶対に力がついたと思う。自分もやればよかった。」という意見が出た。全体的にはディベートを肯定的に捉え、論理的に考える力が付いたと実感していた。

2 ディベート

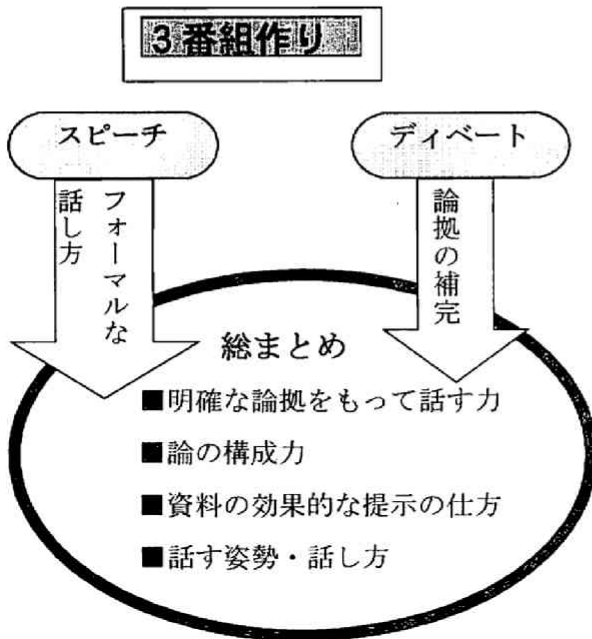
- 論拠をもった話し方
- メディアリテラシー
- 論点の明確化

ディベート 判定・指摘シート

判定：(肯定)・否定の勝ち		肯定	否定
1 立論(定義・内容・構成は明確か)	5 (4) 3 2 1	5 (4) 3 2 1	
2 質疑(効果的な質問をしていたか)	5 (4) 3 2 1	5 (4) 3 2 1	
3 資料(情報を効果的に使っていたか)	5 (4) 3 2 1	5 (4) 3 2 1	
4 反駁(説得力はあったか)	5 (4) 3 2 1	5 (4) 3 2 1	
5 話し方(話す姿勢や言葉遣いは適切か)	5 (4) 3 2 1	5 (4) 3 2 1	
良かった点	肯定→データが多くて良かった。 否定→反駁でしっかり意見が言えていた。		
悪かった点	肯定→データはたくさんあったものの発信源はどこ? 時間制限をもっと意識すべき。 否定→もっと資料を提示するべき!! どこから来たデータなのか。質疑でやり込まれていたのはよくない。よく分からない。		

(4) 番組作り (話し合い・番組作成)、番組発表

ディベートを経験したことで、これまでよりも活発で積極的な話し合いが行われた。これはテーマに対する考えがより具体的になって取り組みやすくなったことと、論点が明確になったためである。また、判定に関わったことで、ディベート出場者だけでなく、見学者となった班員も積極的に意見が述べられ、参加することができた。班活動の形態にも慣れ、ディベートのゲーム性から連帯意識も生まれて、主体的な班活動がなされた。



相談しながら番組作りを行う生徒

まず見学者の書いた「判定・指摘シート」を検討した。他人に客観的に評価されることによって問題点が明確に意識でき、具体的な賞賛からはやる気と自信を得たようだった。盛り上がったクラスほど、協力的かつ主体的に班活動が行われ、ディベートで足りなかった論拠を補完し、構成を練るなど、より論理的な表現を模索する様子が見られた。また、グラフや表を作成し、興味を引くような導入の仕方を考える等、プレゼンテーションを積極的に工夫していた。また、リハーサルでは発表者に皆で細かく注文を付けるなど、話し方にも注意が払われた。番組は最初に参考として提示した「視点・論点」「クローズアップ現代」型の他に、ゲストコメンテーター付きの報道番組型やインタビューを交えたニュース型などユニークな作品がつけられた。このように、番組作りを通して、これまでに学んだ論理的な表現方法を、総仕上げとして主体的に復習し、体得していった。

しかし、こうしたグループ学習では、班によって役割や仕事量に対する不公平感や、人間関係や運営上の悩みも多く聞かれた。教師が個人レベルでの相談に応じ、心理的なストレスの軽減を図るとともに、意欲の無い者には具体的な指示を出し、作業型の仕事を進めながら、班員相互の関係改善を行った。

原稿案シート

班	近頃の学期初め教育委員会にてある 青年班		
司会:	ディベート:		
記録:	原稿:	資料:	番組発表者:
<p>問題提起</p> <p>「クローズアップ現代」型に、ゲストコメンテーター付きの報道番組型やインタビューを交えたニュース型などユニークな作品がつけられた。</p>	<p>視点</p> <p>ディベートを経験したことで、これまでよりも活発で積極的な話し合いが行われた。</p>	<p>論拠</p> <p>他人に客観的に評価されることによって問題点が明確に意識でき、具体的な賞賛からはやる気と自信を得たようだった。</p>	<p>指摘</p> <p>また、リハーサルでは発表者に皆で細かく注文を付けるなど、話し方にも注意が払われた。</p>



コメンテーター付きニュース番組

(5) 単元の学習を通して生徒はどう変わったか

まず、人前で発表する、意見を言うことに対する抵抗感が減った。また、「フォーマルな言葉遣い」を意識するとともに、論理的な内容（論拠の明確さ・情報の妥当性）を意識するようになった。特に、ディベートを経験した後は、論拠を示しながら意見を述べる重要性に気付いたようである。さらに、番組づくりを通して、スピーチ・ディベート時点での反省点を自分たちで確認・消化し、論理的な表現力を身につけた、という自信をもったようである。自己評価シートには、「話し方や人前で話すときの態度が良くなった。」「論拠を重視するようになった。」あるいは、「他人の話の主旨をつかみ、それに対して考えるようになった。」「問題をいろいろな側面から見る必要性を知った。」「文章の読解だけでなく、論理的に話す練習は自分に必要だと思った。」という意見が見られた。

さらに、この一連の学習活動を通して、互いの能力を認め合い、共同で学習に取り組む姿勢が生まれた。スピーチやディベートの中で、級友が社会問題などに対して自分の考えをもち、論理的な話し方ができることに刺激を受け、教室内に級友に対する敬意や社会的な問題について考えたり、議論したりすることを肯定的にとらえようとする雰囲気できたようである。アンケートにも「人の意見を大切にすることを身につけた」という意見が多く見られた。これまでは評価を教師に求めがちであったのに対し、「級友の意見が聞きたい」「みんなと判断すると公平でいろいろな意見が聞ける」と、積極的に級友の評価を聞き、そこから問題点を発見しようとする姿勢も見られるようになった。

総合評価シート（自己評価）

組 番 氏名() A・B/肯・否/テ・ア()役割()	
1 論拠の必要性を理解できたか。	5 ④ 3 2 1
2 公的な話し方や語彙が身に付いたか。	5 4 ③ 2 1
3 人前で話すことが苦にならなくなったか。	5 ④ 3 2 1
4 情報・資料の収集や活用などがうまくできたか。	5 ④ 3 2 1
5 聞き手や評価者としての視点が身に付いたか。	5 4 ③ 2 1
6 活動に主体的に取り組めたか。	5 ④ 3 2 1
7 班活動においてよく協力し、積極的に参加できたか。	5 ④ 3 2 1

特に頑張った点・良く伸びた力

一番伸びたと思う力は、人前で話すという事です。それまで、普段一緒にいる人の前で話すのは少し苦手でしたが、自分の意見を積極的に言えるようになったと思います。スピーチでは、人前で話すときの声の大きさ、スピードなどが勉強になりました。自分が言いたいことを簡潔にまとめる力も少しはついたと思います。ディベートでは、自分がもともと持っている考えなどの先入観を、相手に聞くことができたと思います。

反省点・あまり伸びなかった力

スピーチの時は、まだ人前で話すのが慣れていなかったため、みんなの顔が見れず、下を向くことのほうが多かった気がします。自分の考えをもっとよく理解してもらうには、前を見て堂々とするのが大切だと思いました。また、班活動では、人まかせにしてしまうことがありました。

6 成果と課題

(1) 成果

スピーチ、ディベート、番組作りという一連の学習活動に、生徒たちは興味、関心をもって取り組んだ。

①スピーチ

クラス全員が取り組んだスピーチは回を重ねる毎にその質が向上していった。それは順番の遅い生徒たちが先に行う生徒のスピーチを聞いて、反省点を学習し、それを自分のスピーチに生かしたからに他ならない。話す内容に限らず、話すときの姿勢、スピード、口調にも注意を払い、自分の言いたいことを相手に伝えるために必要なことは何かを学んでいったようだ。その成果は次の学習、ディベートに顕著に現れる。

②ディベート

ディベートで最も重要なことは正確な資料収集と情報整理で、そこで初めて論理的な話し方の構築がなされるのである。生徒からは、「いろいろな物事や事件などについて深く考えるようになった」「説得力ある話や深みのある主張をするためには、ただ話し方がうまければいいというわけではなく、入念な下調べや様々な経験があつてこそだということに気が付いた」といった率直な感想が聞かれた。また、「自分の意見や気持ちを正確に伝えるためにどう話せばいいのか考えるようになった」「人を説得するための話し方を意識するようになった」「聞く側の知識を考慮して話さなければならないことことに気付いた」という感想が複数あつたことも成果と考えている。

③番組作り

番組作りは自分たちの論理を客観的に検証するという意味で大変有効な学習活動だった。生徒たちはディベートゲームのあとの反省と評価者からの意見をもとに、立論を再構築して映像表現として発表した。グループによっては目を見張るような構成で「視聴者」を引きつけるものもあり、第三者を説得するための手段として効果的であった。

(2) 課題

課題として、次に6項目を挙げる。

①スピーチでは話題の偏りや時間オーバーが問題になった。

②先に発表した級友の反省を十分生かすことなく、同様の失敗を繰り返す生徒も見られた。

③ディベートでは、説得力ある話し方と内容とが両立しにくいという傾向が見られた。

④調べ学習の時間がどうしても不足気味であった。

⑤クラスメイトに気を遣うせいか、質疑や反駁のパワーが弱いと感じられることもしばしばだった。

⑥番組作りでは、準備時間が不足し、質的な高まりが不十分となる傾向が見られた。

今回の学習によって、論理的な表現力をもつことの重要性を生徒たちは十分理解することができたわけであるが、このような学習を継続的に実施し、実社会で生かせる力として定着させていくことが大切である。そのためには、3年間の国語教育を通した指導計画の作成及び指導方法の開発が最も重要な課題であるとする。

IV-2 指導の実際

他校の生徒と相互評価を行う機会をもつことによって、自己の論理的な表現力を育てる指導の工夫

1 単元設定の理由

アンケートの結果から、想像していた以上に高校生には改まった言葉遣いや論理的な表現力を必要とする文章を書く機会が少ないことがわかる。したがって、就職や進学のために小論文や面接の対策を迫られたときなどに、多くの高校生は初めて自分の意見や主張をわかりやすく相手に伝える表現方法について悩み始めるのが実態である。少なくとも高校生は学校生活の中で、仲間同士であるからこそ通じる表現に依存していると言える。職員室においても、教師に対して丁寧な言葉遣いのできない生徒が時折見受けられる。友達言葉を許せば、生き生きとしゃべり続ける生徒が、言葉遣いを注意された途端に言葉に詰まってしまう。学級日誌にはクラス内の出来事を喜々として書き連ねるが、原稿用紙を前にするとペンの動きが止まってしまう。そのような生徒の割合は決して低くはない。また、同じクラスであっても親しい関係にない者とは会話の経験を全くもたないという生徒も少なくない。

このことから、高校生の表現力に論理性が欠け、社会生活を営むのに大きな不安を感じさせる大きな理由は、仲間内でのみ通用する表現に依存していること、親しい間柄にある人物以外とのコミュニケーションを避ける傾向が強いこと、の2点にあると考えた。

そこで、本研究では、全く面識のない同世代の他校生に自分の意見・考えを伝え、相互評価を行う機会をもつことの効果に着目した。そして、生徒たちが日頃の表現では不十分であることを認識し、実社会において的確に自分の意見を伝えることのできる表現とはどのようなものであるかを学ぶことを目指した。

2 指導の工夫

- ①相手が自分の考えを察してくれるだろうという姿勢を取り除くため、学校間連携を用いた。
- ②小論文のテーマを示した後、クラス内で小規模なディベートを行い、自分の意見・主張を明確にした。
- ③意見文については事前に評価の観点を指示し、例を挙げて書きやすくした。
- ④自己評価を的確に行えるよう、自己評価シートを作成した。

3 評価の規準

- ①小論文の内容をより論理的にするためには、的確に情報を収集・整理する必要があることを理解したか。
- ②読み手である他校生の存在を意識し、身近な相手に伝えようとするときよりも表現に工夫が必要であることを理解したか。
- ③相手の文章を評価する中で、論理的に書くことの必要性に気付いたか。
- ④他者の評価を受けることによってより論理的な文章を書くきっかけにできたか。
- ⑤自分の付した意見文によって、相手の小論文がどのように論理性を増し、わかりやすくなってきたかを確認できたか。
- ⑥他校生の再評価の意見文が自分の工夫した箇所に触れていることを確認できたか。
- ⑦文章をより論理的に書くことの必要性や自分の主張を論証する方法を理解したか。

4 単元の指導計画

(1) 単元名 社会生活を意識して、自分の意見を明確に書く

(2) 単元の目標

- ①相手を説得するためには、情報を有効に活用して論拠を明確にし、論理的な表現力をもつことが必要であることを実感する。
- ②正しい言葉遣いと、正確な語いを用いて、社会生活で通用する論理的な文章を書く。
- ③身近でない相手に対して自分の意見を述べることで、論理的な表現の必要性を認識する。
- ④主体的に表現力の向上に取り組み、自分の意見を相手に伝えようとする意欲をもつ。
- ⑤読み手を意識した表現をすることにより、自分の文章を客観的に見る。

(3) 学習活動の概要（6時間）

この単元に入る前に、自分の書いた文章を人に読まれることや、他者の文章についてどのような意識を持っているか、意識調査を行う。

時数	生徒の学習活動	○指導上の留意点 ◇評価の規準
1	<p>①意識調査の結果を聞いて、論理的な文章を書くために自分には何が欠けているかを認識する。</p> <p>②論理的な文章を書く課題 「映像メディアと活字メディアのどちらがニュース報道に適しているか」についての説明を受ける。</p> <p>③課題について「例えばどのような報道がなされているか」などからそれぞれの特徴をクラスで挙げていくことによって自分の主張を明確にしていく。（教室内で簡単なディベートを行う）</p> <p>④小論文を書くための構成を考え、自分の主張を論証するための資料を次時まで集める。 （映像メディアと活字メディアが同じニュースを報道したものについて比較検討することを、論拠とする）</p>	<p>○論理的な文章とはどのようなものか理解を図る。（不特定多数の相手に、誰でも分かるような言葉や論理性をもった文章を書くことの重要性を認識する）</p> <p>○論理的ではない文章とは何かという例を挙げ身近な相手には省略や、断片的な表現など論理的とは言えない表現を使っていることに気付く。</p> <p>○報道のあり方について話し合うことによって社会に目を向ける。</p> <p>○社会的な問題についての情報を入手するために、調べ学習をする。</p> <p>◇どのような表現が論理的であると言えるかについて理解したか。</p> <p>◇自分の主張を論理的な表現にするためには、論証するための資料が必要であることを理解したか。</p>
2	<p>①収集した資料をもとに、1の①を意識しながら小論文を作成する。</p> <p>②論理性を重視した文章を書くために、資料を有効に根拠として利用する。</p> <p>③語いや言葉遣いに注意する。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">（他校の生徒と小論文を交換する）</p>	<p>○「他校の生徒に読んでもらうこと」を意識して書く。</p> <p>○書いたものを推敲する習慣を身に付ける。</p> <p>◇自分の主張を論証するための具体的な事例や資料を交えて、小論文を書くことができたか。</p> <p>◇相手にわかりやすくなるように表現を工夫し適切に推敲することができたか。</p>

3	<p>①他校の生徒の小論文を読み、論理的であるところと、わかりにくいところについて、評価した意見文を書く。</p> <p>②その意見文も論理的に整って相手に良くわかるように気を付ける。</p> <p>③他校の生徒の小論文について検討する中で、自分が今まで発見できなかった論理的な根拠や、優れた文章表現を学ぶ。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">(他校の生徒と小論文を交換する)</p>	<p>○相手の主張にしっかりとした根拠があるか、文章が乱れていないか、社会的な視点に優れたものがあるかなど、評価の観点を指示し、例を挙げて生徒が意見を書きやすくする。 (一人3枚の小論文を読んで、評価する)</p> <p>◇相手の文章を評価する中で、論理的に書くことの必要性に気付いたか。</p> <p>◇読み手を意識して意見文を書くことで自分の文章を客観的に見る視点を持ちよりわかりやすい語り、言葉遣い、表現を工夫したか。</p>
4	<p>①他校の生徒により評価された自分の小論文を見直し、自分の小論文について、再び推敲する。身近ではない相手に自分の言いたいことを的確に伝えるためには、論理性が必要であることを実感する。</p> <p>②4の①をもとに、課題の小論文を書き直す。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">(他校の生徒と小論文を交換する)</p>	<p>○他校の生徒が評価している意見文の内容を理解できるかについても補助説明を加え、自分の考えを伝える際にはどうすればわかりやすいかを学ぶ。</p> <p>○書き直した小論文はどこを改善したのかをはっきり意識させる。</p> <p>◇相手の小論文を読み、他者の評価を受けたことによって、より論理的な文章を書く手がかりとなったか。</p> <p>◇他者の評価を得ることによって、さらに意欲的に意見を伝えようとしたか。</p>
5	<p>再度、他校の生徒の小論文を読み、前回と比較して良くなったところを再評価する。さらに評価をする際に、意見文の論理性が前回より高まっているかを確認しながら書く。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">(他校の生徒と小論文を交換する)</p>	<p>○前回と比較する際に、自分の指摘した意見文の内容が、相手の小論文の変化に反映しているかを読み取る。</p> <p>◇前回の小論文と比較して、どのような点に工夫がなされ、それによって論理的になった、わかりやすくなったことを確認できたか。</p>
6	<p>①前時まで(第1時から第5時)の内容について自己評価を行い、自分の小論文の論理性が高まったことを確認する。身近ではない他者に自分の主張を的確に伝えるためには、しっかりと論拠を持って、論理的に文章を書く必要があることを自覚する。</p> <p>②自分で調べたり、相手の小論文を読んだりすることにより、自分の意見を述べるためには社会的な問題について情報収集を続けることの必要性を認識する。</p>	<p>○評価については、自己評価シートを用いる。その他に、この学習活動を通して自分の文章を書く意識が変わったことについての反省を書く。</p> <p>○他者の評価を受けることで、よりよく書こうとする動機付けになったことを確認する。</p> <p>◇再評価の意見文が、自分の工夫した部分に触れられていたか。</p> <p>◇論理的な文章を書くことや、自分の主張を論証する方法について理解したか。</p>

5 生徒はどのように学習に取り組んだか

(1) 対象クラスへの事前意識調査及び調べ学習の指導

対象クラスの生徒に「書くこと」に関する簡単な意識調査を行った。以下がその内容である。

「書くこと」に関する意識調査

- ① 文章を書く上で、以下の項目が身についていると思いますか。
- 4 よく身についている 3 身についている 2 あまり身につけていない
1 身につけていない のうちあてはまる番号にそれぞれ丸をつけてください。
- ア テーマに対して、何を書けばよいかを短時間で考える。 《 4 3 2 1 》
イ 自分の書きたいことを順序よくまとめる。 《 4 3 2 1 》
ウ 文章を長くふくらませる。 《 4 3 2 1 》
エ 誤字、脱字を書かない。送りがなを正しく書く。 《 4 3 2 1 》
オ テーマに対して適切な言葉遣いや表現を用いる。 《 4 3 2 1 》
カ 原稿用紙を正しく使う。 《 4 3 2 1 》
キ 文章を書き始める前に、下書きメモを書く。 《 4 3 2 1 》
ク 提出する前に読み返して、推敲する。 《 4 3 2 1 》
- ② あなたは同年代の人の書いた文章（作文や小論文）を読みたいですか。
- ア はい イ いいえ ウ わからない
- ③ あなたは自分の書いた文章（作文や小論文）を同年代の人に読んでもらいたいですか。
- ア はい イ いいえ ウ わからない

①の質問に対する回答は、ほとんどの項目で2と1が70%を占めた。②の質問に対しては、80%がアと答え、③の質問に対しては50%がイと答えた。

身近でない人に自分の考えを伝えるためには、明確な論拠に基づいて話をしなければならない。また、相手によって言葉遣いや用いる表現も工夫しなければならない。それに気付くように、書いた文章を生徒同士で交換し、相互評価を行う指導を考えた。しかし、アンケート結果をみると他人の書いた文章は読みたいが、自分の文章は読まれたくないという生徒が多い。クラスの生徒同士だと、遠慮が生じたり、馴れ合いになったりということもある。校内の他のクラスと交換するとしても、やはり同様の問題が生じやすい。

そこで、他校との学校間連携で、文章を交換し、相互評価を行うことにした。全く面識のない他校の生徒に自分の意見を理解してもらうには、論理的な表現が必要であることが実感できるのではないかと、また相互評価により相手の文章の良かった点、足りなかった点を書くことで、さらに論理的な表現の必要性を実感し、身につけることができるのではないかと考えた。

宿題として、新聞（活字メディア）及びテレビ（映像メディア）のニュースの長所と短所をそれぞれ考えてくるように指示した。はっきりした主張ができるように、学校ごとに、活字メディア優位か、映像メディア優位かの立場に立って考えさせた。社会的な問題に対する興味関心を高める機会と考え、箇条書きでよいから、なるべく多くの論拠を考えてレポート用紙に書いてくるように指示した。

(2) 調べ学習・討論、小論文作成、添削・相互評価1

初めに、教師が前述のアンケート結果を報告するとともに、単元のねらいについて説明した。続いて、生徒が宿題を発表し、それを参考にしながら生徒同士で簡単な討論を行った。新聞にもテレビのニュースにも一長一短あることを理解した。次時に「映像メディアと活字メディアのどちらがニュース報道に適しているか」という小論文を書くことを説明した。また学校間で小論文を交換し、互いの文章を添削し合うことも知らせた。(第1時)

前時の資料を参考にしながら、小論文を書いた。他校生と交換すると知らされているためか、生徒同士書き上げた論文を自主的に交換して読み始めた。そしてお互いに意見を言い合っていた。これは普通の授業では見られない光景であった。時間内に書き終えられなかった生徒は家で完成させた。(第2時)

交換した意見文の添削を行った。生徒一人につき3~4人分の作品を添削した。添削は「良いところ」「分かりにくかったところ」それぞれに線を引き、さらに具体的に「どのような点が良かったか、分かりにくかったか」を文章で書いた。

他者の小論文の添削を通して、「自分の文章も読み返して推敲すればよかった」という反省が見られた。「主張がはっきりしていない」「表現方法があいまい」「比喻が適当でない」「話し言葉で書かれている」など、論理的で分かりやすい批評の言葉を書くことに苦心していた。自分の考えを伝えるための語いが不足していることも実感していた。(第3時)

生徒原稿(添削・相互評価)

The image shows a student's handwritten essay on the topic of 'Image Media vs. Text Media'. The text is written in Japanese and is annotated with lines and boxes. A vertical margin note on the right reads: '活字メディアと映像メディアではどちらがニュースに詳しいか、という問いが書かれている。' (Which is more detailed for news, text media or image media? The question is written.)

The main text of the essay includes the following points:

- 私は、ニュース報道において映像メディアがすぐれていると考える。それは、
- まず第一に、表情や声が入ることにより、その人の気持ちや態度がよく伝わる。そして、その人の気持ちや態度がよく伝わる。そして、その人の気持ちや態度がよく伝わる。
- また、映像には、悲しい時の声や表情、嬉しい時の声や表情など、映像を見ればよく伝わる。そして、その人の気持ちや態度がよく伝わる。
- 三つ目は、新聞記事を読むときも、全文を読まず、特に大切な所を抜き出して読む。これは、映像でも同様である。
- それと、自分で読むよりも、朝の性しい時に、例えば、サッカーの試合や、野球の試合など、映像を見ればよく伝わる。そして、その人の気持ちや態度がよく伝わる。
- 以上を踏まえて、私は、映像メディアがすぐれていると考える。そして、その人の気持ちや態度がよく伝わる。
- 以上を踏まえて、私は、映像メディアがすぐれていると考える。そして、その人の気持ちや態度がよく伝わる。

Below the main text, there are two boxes containing feedback:

- Box 1 (Left):** 分かりにくかった所を引いて、どういった所が分かりにくかったか、具体的に書きなさい。 (Draw lines around the parts that are hard to understand, and write down what is hard to understand specifically.)
- Box 2 (Right):** 良いところに線を引いて、どういったところが良かったか、具体的に書きなさい。 (Draw lines around the good parts, and write down what was good specifically.)

(4) 添削・相互評価2、自己評価

再び他校の生徒の小論文を読み、前回と比較して良くなったところを再評価した。特に意見文として論理性が高まっているかを確認して評価した。前回の自分の添削・評価が小論文にどのように反映されているかを確認した。反映されていない場合は、自分の添削・批評が適切であったか、分かりにくくはなかったかを再考した。(第5時)

前時までの内容について自己評価を行い、自分の小論文が論理的になったことを確認した。身近でない相手に自分の考えを伝えるためには、論理的な文章を書かなければならないということを理解した。他校の生徒との相互評価により自分の小論文の良い点と悪い点が分かり、小論文の主張が明確になってきた。他校の生徒との小論文の交換は、かなり刺激になったようである。交換を意識して調べ学習を入念に行ったり、友人と活発に話し合いながら構想を練ったりしていた。授業後の感想には、今回のような交換を今後も続けたい、自分では分かって書いているつもりでも他者には伝わっていないことが分かったなどがあった。(第6時)

最終評価シート 主な生徒の感想・意見

- ① 相手の考えをうまく吸収して、新たに自分の考えが生まれてくることができる。やはり客観的に見てもらうことにより、自分が見えてくる。
- ② 他人の文章の良さを探すことはとても大変なことである。悪いところはすぐ見つかるのに。そして同じくらい、他人に気持ちを文章で伝えるのは難しいということが分かった。
- ③ 同じ学年の人に、わかりにくいと書かれると、少し悔しい気がしたので、もっと頑張ろうという気にさせられるということが分かりました。
- ④ まず、ひとつひとつ具体的な例を挙げることにより、よりよく分かってもらえることを知った。そして、自分の意見を他の人に評価されることで、いろいろな考え方が分かって良かった。
- ⑤ 相手の文章を読むことで、自分とは違う考え方や、論の展開の仕方、違った文章表現を知った。いつもより緊張して書き、何度も読み返した。

最終評価シート

- 1、論理的な文章とはどのようなものかわかった。
ア、よくわかった イ、少しわかった ウ、あまりわからない エ、全くわからない
- 2、身近でない相手に自分の考えを伝えるには、論理的な文章を書かなければならないということがわかった。
ア、よくわかった イ、少しわかった ウ、あまりわからない エ、全くわからない
- 3、他校生との相互評価により、自分の小論文の良い点と悪い点がわかった。
ア、よくわかった イ、少しわかった ウ、あまりわからない エ、全くわからない
- 4、他校生との相互評価により、自分の小論文の主張が明確になった。
ア、とても明確になった イ、やや明確になった ウ、あまり明確にならなかった
エ、全然明確にならなかった
- 5、他校生との相互評価により、自分の小論文の主張を支えるために、はっきりとした根拠をあげることができた。
ア、よくできた イ、少しできた ウ、あまりできなかった エ、全くできなかった
- 6、今回の授業で、論理的な文章を書くことができた。
ア、良くできた イ、少しできた ウ、あまりできなかった エ、全くできなかった
- 7、他校生と作品交換をしたことは、良かったか。
ア、とても良かった イ、少し良かった ウ、あまり良くなかった
エ、全然良くなかった

6 成果と課題

(1) 成果

同世代の他校生に自分の文章をみてもらうという説明を受けたせいか、普段より入念に下調べを行うとともに誤字、脱字にも一層注意をはらい集中力と緊張感を持って取り組んでいた。また、他者に見せるという意識が高じたためか自主的に生徒同士が書き上げた論文を交換し読みはじめ、お互いに意見を言いあうなど意欲的態度が随所にみられた。

同世代の他校の生徒の文章を読む姿は真剣そのものであった。論文を書くことと他者に対して評価を書くことの違いと、他者を評価することの難しさに当惑していたのである。そこから他者に対して評価を行うためには自分自身はその論文の主旨をよく理解していなければならないことに気づき、人を批評するということは独りよがりの考えや軽はずみな憶測では立ちゆかないことを理解した。さらに自分の考えを伝えるための語いが不足していることを痛感していた。

相手から評価された自分の論文を読み返すことにより、自らの文章における欠点を修正して文章力の向上につながった。同世代の新鮮な批評が新たな発見のきっかけとなり、論理的に表現することの必要性を痛感した。以下、今回の実践における成果を改めて列挙する。

- ① 極めて意欲的、自主的に授業に取り組んでいた。
- ② 読んでもらう相手を意識して常に緊張感をもっていた。
- ③ 自分の文章に欠けているものを認識若しくは再認識することができた。
- ④ 相手に理解してもらうために様々な表現力を身に付けたいという向上心が芽生えた。

(2) 課題

今回の学習によって身につけた「論理的に表現する力」は、まだきっかけの段階である。日々の学習を通じて定着させ、自分のものとしていかないと、これからの社会生活に必要な論理的な表現力を十分身に付けることはできない。そこで、教科指導やホームルーム活動、学校行事など、学校教育のあらゆる機会に「論理的な表現力」を磨いていくよう取り組む必要がある。

又、自分の意見を育て、その論拠となる社会的常識や、現代用語の知識、時事問題への認識を深めるためには、日常的に社会問題に触れる必要があるが、前述のアンケートに見られるように生徒の読書習慣は希薄である。基礎的な知識や教養を身に付けるために、読書習慣を身に付けるとともに、社会への関心を高める工夫が求められる。

生徒の「ものを書く」「自分の意見を述べる」ことに対する抵抗感は依然として大きい。現代の高校生は「伝えなくては分からない」「分かろうという努力がコミュニケーションを生み出す」という経験を継続的に行っていく必要がある。

最後に、今後の課題を2点挙げておく。

- ① 今回は「映像メディアと活字メディアのどちらがニュース報道に適しているか」という題で小論文を書いたが、今後継続的に社会に興味をもつことのきっかけになる時事問題などを扱う方が、さらに意欲を引き出す可能性もあると考えられる。
- ② 原稿用紙の他に、調べ学習をメモするワークシートや、小論文の構想をメモするシートを準備するとさらに論理性の高まりを実感できたのではないかと思われる。

V まとめと今後の課題

1 研究のまとめ

本研究では、改まった場で多人数を相手に話したり、親しい間柄にない他者に対し論理性に気を配って文章を書いたりする機会をもたない生徒に対して、社会人として必要とされる言語能力を育成することを目指し、「社会生活で必要となる論理的な表現力を育成する指導及び評価のあり方」を研究主題として、二つの研究仮説に基づき検証授業を行い、以下の成果を得た。

「話すことの領域」では、三段階の取り組みにより、前段階で得られた成果を次の段階に生かしながら生徒の興味や意欲を引き出した。単元全体を通じて論理的に話すことの意義や方法について生徒の理解が進んだと考えられる。

ディベートは効果的な学習方法として知られているが、我々はそれに加えて「番組作り」という手法を取り入れ、ディベートのために準備した立論とそれに対する反駁を再検証させた。そこで生徒たちはあらためてコミュニケーションのためには論理的な表現力が不可欠であるということ学んだ。自己評価、相互評価を行いながら授業を進めることにより、生徒の姿勢にも積極性が感じられるようになった。今後はこれらの経験をふまえ、あらゆるコミュニケーションの場で「論理的な表現」を行ってほしいと期待している。

「書くことの領域」では、他校の生徒と相互評価を行うことにより、生徒が小論文に取り組むことに対して非常に強い意欲をもったことが何よりの成果であった。誰が読んでも論旨が明確に読みとれるよう、文章の論理性や客観性に留意しなければならないということに気付くことができたと考える。論文にふさわしい文章とほどのようなものかモデルを求めたり、言い回しの適不適を自発的に確かめようとしたりするなど、よりよい文章を書こうとする姿勢が大いに向上したと言える。他者の文章の論理性の不足を指摘したり、他者の評価をもとに書き直したりする作業を通して、多くの生徒はより一層論旨の明快な文章を書くようになり、またそれを自覚するようになった。日ごろ、よりよく表現することを求められる場が乏しいため、生徒の表現力の向上の機会も少なくなっていると思われるが、この実践がそのための良い機会になったことが確かめられた。

二つの検証を通じてわかったことは、論理的な表現の機会の少ない生徒たちに、そうした場を授業の中で提供することが有効であるとともに、生徒たち自身もそうした機会を望んでいるということである。また、指導の各段階において、的確に自己評価・相互評価を行うことにより、授業のねらいの理解が進むとともに、次の学習への意欲の喚起につながるということが確認できたことである。生徒たちは、実社会に触れるきっかけを常に求めているとも言える。関心の高いことがらを教材として取り上げることで、生徒たちの興味を呼び起こし、更に調べていこうとする主体的な姿勢を育てることができると確信した。

2 今後の課題

今回の検証で得た成果を単発的に終わらせず、継続、発展させていくことが重要である。そのためには、年間の指導計画の中での位置付けを明確にし、3年間の継続的指導を行っていくことが必要である。また、特別活動や総合的な学習の時間をはじめ、学校の教育活動全体で、論理的な表現力の育成を考えることもこれからの課題であると考えられる。